
魔獣使いは我が道を行く

ポケモントレーナー リリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔獣使いは我が道を行く

【Zコード】

N8119X

【作者名】

ポケモントレーナー リリア

【あらすじ】

神崎玖惹は、いつものようにポケモンを売買している研究者達をぼこぼこにしていたが、一人の研究者に銃で撃たれてしまう。

一緒に戦っていた相棒達に分かれを告げ死んでしまい次に目覚めたときには、伝説のポケモン「アルセウス」に出会い転生の話を持ちかけそれを受け入れた。

彼女は転生し「リボーン」の世界へ…。

紹介（前書き）

リボーンとポケモンの「ラボはどうだらう」と思い書いてみました。

紹介

名前	神埼 玖惹
フリガナ	カンザキ クジヤ
性別	女
年齢	ツナ達と同じ
身長	165センチ
体重	50キロ
一人称	私
誕生日	7月7日
性格	無表情がいつもの顔で、心を許した人にしか笑わない
髪の色	黒
目の色	青
髪型	ショートだが耳の部分だけ鎖骨ぐらいまでの長さ
着る服	白い服や、王冠の入ったプリントTシャツを好む。
必需品	モンスターボールに入ったポケモン
携帯 財布 ベージュのポーチ ナイフ（護身用）	

手帳

備考 ポケモンと共にやつてきた転生者

ポケモンを「家族」または「相棒」と呼び、傷つける輩やからは容赦ない制裁を下す

また人と関わることを嫌う

そのため周りの人から孤立しがち

現在は並盛から並中まで十キロ離れたところにある廃屋に住んでいる

(ちなみに学校へ登校する時はサーナイトの持つ技「テレポート」で登校する

着地場所はトイレなど)

一応武器はあるが、基本的に魔獣を使って戦う

一言

「私と関わるなら精神科へ行くことをお勧めするよ

名前	清水 由香
フリガナ	シミズ ユカ
性別	女
年齢	ツナ達と同じ
身長	152センチ
体重	49キロ
一人称	ウチ
誕生日	11月11日
性格	優しい
髪の色	黄色
目の色	茶色
髪型	ショート
着る服	水色やピンクといった服を着る たまに奇抜な服を着る

必需品 代々清水家に伝わる短刀「雪羽」^{ゆきはね}

携帯 財布

備考 トリップ者

裕福な家庭で育つた

現在はマンションで独り暮らし

神様からは最強設定を特典としてもらっている

玖菴のことを邪魔ものとして嫌っている

一言

「私に嫌いな人なんていません。皆いい人なんです」

注意事項

・普通は4つの技しか使えませんが、この小説では秘伝技や技マシ

ンで覚えられる技を使います。

- ・レベルは無限大です。なので無限大に強くなります。

進化は主人公の見極め?となります。

石や交換などの特殊進化は、都合上違った形で進化されます。

- ・主人公は都合上6体以上のポケモンを使います。

- ・ポケモンの呼なれ方が途中で変わってきます。

- ・リングの炎とポケモンの技を掛け合わせたオリジナルの技が出てきます。

* 注意事項は追加あります。 *

紹介（後書き）

玖惹の手持ちポケモンはのちほど公開します。

とりあえず、私が実際に使っているポケモンと玖惹が使いそうなポケモンを出しあうと思います。

～質問コーナー～

皆さまの好きなポケモンは何ですか？

私は、ザザンディアとブリッキーにランターンなどが好きです。

ではまたいつか投稿をしたいと思います。

今いる世界にサヨナラを（前書き）

そう言えば伝え忘れがありました。

ポケモンは玖憲の使うポケモン（控え軍も含わせて15匹）

しか出しません。

玖「すいませんね…作者がバカで」

…主人公こんなドSでしたつけ！？

玖「いろんな作者はほつといて本文をビリヤー」

今いる世界にサヨナラを

自分が、死ぬ時は誰かに殺されてしまうんだろうと感じていた。

いや…病氣で死ぬこともあつただろつが。

物心ついてから、私は悪さばっかりしてきた。

人のポケモンを強奪、建物を自分のポケモンを使って破壊はもちらんのことだ…

人に対しての暴言は毎日のこと。

よく、自分のポケモンにも悪口とか言っていた。

だからこんな自分に友達はいないし、近づくことすらなかつた。

だからこんな自分にもいつかは、天罰が下ると思っていた。

で、今私はその危機に直面している。

今日もいつも道理、自分のストレス解消のためにポケモン売買や虐待、

実験をしてるアジトに堂々と私の相棒達と正面から乗り込み研究者たちを制裁していた。

オリに入っていたポケモンたちを解放をしようとしたりで、まだ氣絶していなかつた研究者が…

銃で私の手持ちポケモンの一匹であるハピナスのアロエを撃とうとしていた。

それに気付いた私はアロエを押しのけ撃たれた…ツというわけで。

「ハピイツ！」

今、アロエに治療されているが傷口はなかなか消えないのが自分でもわかる。

「うぬせー…もうここよ。直らないから」

「ペイー。」

嫌だとでも言いつゝにやめよつとしない。

アロエの皿からは大粒の涙がボロボロ私の腕に落ちる。

なんで私なんかのために泣くのか理解しがたいよ。

アロエのほかに、エネコとか、サザンドリアのタナトスとか、

何でそんな泣きそうな顔で見るのさ。

「…泣くやつは…嫌い…だよ」

赤く染まつた手でアロエの皿を触ると、綺麗なピンクの肌が血で汚れてしまう。

「…私のために泣く奴はもつと嫌いだ」

ああ、もう眠い。

死ぬ時は走馬灯が見えるとかいうナビ全くもつて見えないし。

もつ、耳まで遠くなってきた。

…でも、

「君達は相棒であり家族だから……特別に許してあげるよ」

私が初めて認めた相棒達よ。

「めんなさいは言えないけど、

「私は……幸せ……でした……！」

感謝だけはしてあげる。

今までこんな私といってくれてありがとうございました。

そして

ナコウナラ

私が最後に見たのはアロエとダークとヒネコの泣く顔。

ああこれでいいや…次に会うことはないよな。

もつ私を忘れて、幸せになつてくれることを願つよ。

今いる世界にサヨナラを（後書き）

主人公は基本的、最終進化を遂げたポケモンにニックネームをつけます。

なので、文中に出たエネコは、名前はまだつけられていません。

初めてまして、行つてきます

私が目を開いて思つたこと…。

何もない。

ただ真っ白な世界が広がつてゐる。

何処を見ても、白、白、白。

もしかしてここは噂の死んだ人が来るところなのだろうか？

地獄？ それともあり得はしないけど天国？

『ここは異世界の狭間』

「は？」

頭の中で響く声。これは一部のポケモンが使えるトレパシーだ。

私の目の前が暗くなつたので視線を上げると、

そこにはいたのは細くしなやかな純白の身体、
宝石のようなパークが埋め込まれた金属性的な質感の装飾部位は
金色で、

たてがみ状のパークが頭部にあり4足歩行で白馬を思わせるシルエットの姿を持つポケモン。

「伝説のポケモン様であるアルセウス様を捕める時が来るとは思いもしませんでしたよ」

『フフ…初めましてだ。玖惹よ』

「あなたのようなポケモンがこんな私にどんな御用で?」

『玖惹よ、そなたは死んだのだ』

「…いきなり何？ そんなこと分かってるよ」

『そなたのおかげで組織が壊滅し事件は解決した。』

そなたの犠牲とともに…』

「ふーん… で？」

『我はそなたを氣に入つてゐる。

そなたが死んだとき我は悲しんだ』

「… 一度ポケモン専用の眼科へ行けば？ それか精神科にいつとい
で」

話しが繋がつていないよ？

何が言いたいのかな？

『なあ、 玖惹よ』

「何？」

『違つ世界で生きなおさないか？』

「… は？」

『このポケモンとなんでもない爆弾を落としたよ。

「この私が？ 生きなおす？ 理由を聞かせてほしいな」

『我がそなたを氣に入つたからだ』

そんな理由？？とおひとしたがアルセウスはなかなか私から視線を外さない。

『我はそなだからこそこ生きてほしいのだ』

私だからこそ？

「私だからこそこ？ … でもさ私なんかを転生させても良いな訳？」

『問題ない、我は神の存在だから作るのも壊すのも我が決める』

『じゃあ、私がその新しい世界でその世界を壊そつとするのなり？』

『そなたは、悪を壊しても世界を壊さない』

「知つてゐるよつた口ぶりだね」

『知つてゐるからな』

アルセウスが笑つてゐるよつと見える。

まるで、親友と話してゐるよつた気持ちになつてゐる。

…まあ、別に新しい世界で氣ままに暮らすのも悪くないね。

「いいよ。貴方の願い聞きこれるよ」

『そつか。では特典も入れよう今頃アイツも説得をしていることだからな』

説得？ 誰を。まあ良いけど。

『さて… そろそろ別れの時だ』

「ふーん、じゃあまたいつか会えたらいいね」

『そうだな』

私の体がだんだんと透けて薄らいでいく。

どんな世界に行くか分からぬ。

どんな特典がつくかわからない…けど。

「ありがと…アルセウス」

『そなたに数多くの幸があることを祈る』

まあそれなりに頑張つて次の世界を、私なりに楽しんでくれるよ。

起きたらそれは…

「…なにこのボロボロの状態」

皿を開けると、視界に入つたのは荒れ果てた部屋。窓は割れて破片がそこらに散らばっており、カーテンは破かれている。

テーブルはもちろん照明も粉々に砕けている。

無事なものと言えば、今自分が寝転んでいる黒い革製のソファだけ。

まさかアルセウス…転送する場所間違えた?

「…まあ、別に豪華な家に送られても迷惑なだけだし」

ゆっくり身体を起して体の動きを確認することより。

指を動かし腰を捻る、立ち上がり屈伸。

で、首をバキバキと回す。

よし…死後硬直とかしてない。

服も血だらけになつてない、ほつれも穴も空いてない…得した。

「完璧生前のまんまだね」

次は所持品の確認。

パーカーの内側にナイフが10本ある。

…殺人鬼扱いしないでね。これはあくまでも護身用だから。

てか本当は、ナイフじゃなくてギロチンを使って戦うからね。

まあ、今は手元にないけど。

で、パーカーのポケットに財布と手帳。

所持金？ まあ大体10万ぐらい入っている。

手帳は、その日の日記を書いたりしている。

次に腰の方を触った時に気付いた。

「いつも」の感触が…ない。

ない…ボールホルダーが、モンスター・ボールがない。

あいつ等がいない。

とたんに体が凍りつくような感覚がする。

「…[冗談きついよ、これ」

思わず両手で顔を覆う。

「うん、悲しい。あこづらがいなことなんかがびしー。

「「あー……」

思わず涙をこぼしてしまった。

すると何かが私の田の前でガシャンと落ちる。

覆っていた手を離し、落ちてきたもを見てみると、

…………えつ なになにな

田を見開き、思わず後ずさる。

「嘘……だって……ええーー？」

「まく眞葉が出てこない。

だってそこにあるのは

私のモンスターボール。

とりあえず確認のため、9個のモンスター・ボール全てを投げる。

「ギャオオー！」

「――――」

「え、 チョ…ギャアアアアア…！」

出てきたと共に、私に飛びついてくる顔なじみのある皆。

まざい…圧死を迎えるつだ。

「ハピッ！」

「グルオオオ！」

ハピナスのアロエヒトドグラーが私の危険を感じ取ってくれたのか、

他のポケモンに離れるように指示する。

また、死ぬことになろうとしたよ…危ない危ない。

落ち着いたところで皆を見る。

皆泣き顔や心配顔でブツツサイク。

うん、かなり不細工だ。

「酷い顔だ、ね」

思わず声が震える。

顔が熱くなり、涙が出てくる。

皆も不細工だけど、自分も不細工だ。

「特典つて…これのこと、だつたんだ」

もつ、嬉し過ぎて…言葉が出ない。

氣前がよすぎだよアルセウス。

「皆、大好きだ！」

その瞬間、また皆が泣きながら飛びついてくるが、

私もまた泣きながら私の「家族」を抱きしめた。

*

「… わて、涙も取まつてきたし、これからは事を難ぐよ。」

「一番聞きたいのは、『じさせじ』なのがどこか？」

何かヒントになる物ないかなーーと思つてこらへ、

「…」

「… 何、ハネコ？」

ハネコが、紙切れを口でくわえてくる。

何、いつの間に？

そう思い紙切れを受け取つて広げてみる。

『『』の手紙を見て、『』と無事に別の世界へ行けた『』
んだね。』

そなたの情報はすべて前の世界から引き継いである。

だから、そなたが情報屋として活動していたこともそのままだ。

そしてこの世界ではそなたの思つてこなこととは違つかもしれない。

ポケモンたちはきっと異端扱い、魔獣と呼ばれる可能性があるだらうがそなたなら大丈夫だ。

そなたを信じじる「家族」と共にそなたの思つ道を歩けばいい。

最後にこの世界でも学校はある。

そなたは中学生だから学校へ通う義務がある。

並盛といつ中学校だ。

読み終わったら今から行くよ!」

健闘を祈る
『

パソコンで打たれたかのよつこきつちりとした文字。

差出人は書かれてはいないが、私には分かっている。

紙切れを折りたたみ手帳にしまいこむ。

「学校ね」

まあ、中学生だけど前の世界不登校気味だったし。

いじめっていうのは無かつたけど、何か浮いた感じがしてたからなー。

ま、いつか。

それに情報屋してたのも引き継がれてたのか。

まあ、お金ないとの廃墟に暮らせないからありがたい。

てかところで……、

「今何時？」

まだ7時ぐらいだよね。

「じゃあ、大丈夫か」

とりあえず、制服が何処にあるのか気になる。

「ハピー」

「…何処にあったの？」

いつの間にかアロエが、制服を持っていた。

「まあ、いいや。ありがと

制服を受け取り着替え始める。

女子用だよもちりん。

何？

男子用じゃないのって…エレベーターの男装少女だよ。

「じゃー行きますか。皆戻れ

皆素直に元に戻るが、

「——」

「何？ 早く戻つて。捨てるよ

「……——」

Hネコだけは戻らずに私の足元によつすり寄る。

めんどくさいな。

「 もうここ…行くよ」

「 —/—」

あきらめ、Hネコと共に学校へ行くことにする。

まあ、途中でビームに隠して置ことか、無理やりにでも戻すけ
ど。

起きたらそれは…（後書き）

ちなみに主人公は、リボーンを知りません。
所で何かおかしい部分がありますね。

主人公答えてください。

「紹介で学校に登校する時はテレビポート使うんじゃないのって
質問が来そุดからこの場を借りて答えるよ。
テレビポートは一度来たことある場所に行けるからね。
並中はまだ行ってないからテレビポートでいけないので」

主人公ありがとうございました。

学校

職員室前

「失礼しまーす。今日いじに転校することになつた神崎ですけど…」

「ああ、君かもうすぐ授業が始まるから一緒についてきてくれ」

「わかりました」

校門にはいる前にエネコをボールに戻し、学校に入ってきたよ。

まあ、かなり無理やりな感じだつたけど。

え？ どうして学校までの道のりを知つてゐるの？？

…それはあれだよ。

同じ制服を着た生徒の後をこつそつと付いていったからさ。

断じて言おひ。

間違つてもストーカーなんてしてないからね。

「じゃあ、呼んだら入つてきてくれ」

1
はい

ああ、退屈……。

メンディな学校。

「神埼一、入つてこーい」

がらつと無言でドアを開ける。

「転校生の神崎玖惹だ。」

神埼、自己紹介しろ」

黒板に私の名前を書こうとするも、漢字が分からなく手が止まっている。

まあ、この漢字はあまり知られていないから無理もない。

仕方ないので、自分で書きますと言った漢字を書いていく。

書き終わった後、チョークを置き前を向かい挨拶。

「…えー、神崎玖惹です。

名前の方の漢字が読みにくいと思いますが、玖惹と読み、玖に惹きつけるように」という意味です。

まあ後は、静かな方が好きなのであまり大きい声で騒ぐといひは苦手です

…これでいいのか？自己紹介。

なんて言つ突っ込みが聞こえてきたが聞き流す。

つていうか、さつきから私を見てガンくれてるこの不良は誰？

銀髪つてまさに不良だし。

「えー席は、山田の隣の席だ。山田、手を挙げや

「えー? も、はー」

ああ、あそーね。

すたすたと無言で歩きそのまま座る。

「えーでは、エヤを終わる

席につき一度H.Rが終わる。

すると、私のまわりに女子が群がる。

「何処から来たの?」

「趣味は?」

「恋人いる?」

などなど、そもそも質問がマシンガンのように飛び交う。

「……」

「ハヒとおしいな。

「ひねりの嫌いってさつを書つたはずだよね。

まつたくめんどくわい。

しばらく押し黙つていると、別の教師が入ってきて次の授業が始
まった。

*

SIDE由香

今日ウチのクラスに転校生が来るらしいけど、ウチの知つて
いる原作ではそんなことはなかつた。

つまり…トリップ者の人かな?

だとすれば神様から聞けばいいよね?

『神様？ 聞こえてるよね？』

『ああ、アイツは転生者だ。しかし俺は転生はさせていない…。

多分別の奴が転生させたんだろうな』

『え？ 何か能力貰つてる？』

『いや、何もねえぞ。…お、由香…『いつは大丈夫だ』

『何が大丈夫なの？』

『こいつは原作を読んだことがない。つまり…この世界を知らない』

じゃあ、気にしなくても良いのね。良かつた。

でも…邪魔をする人だつたらどうじよ…。

『じゃあ、オレは戻るな』

『ありがと、神様』

『オウ！　がんばれよ』

じゃあ、早速獄寺クン達のところへ行かないといつ。

S H D E E N D

*

昼休み

とりあえず屋上へ行くと誰も来ていなかつたので、腰につけてい
るポールを投げる。

出すのはエネコだけ。

…なぜエネコだけかつて？

もし仮に他のポケモンを出すとしよう。

私の持っているポケモンは、ドラゴンや虫っぽいポケモンしかい

ない。

後、不定形なポケモンもいるが。

ポケモンのことを知らない人から見れば叫んで逃げ出すだらう。
しかし比較的ハネコは猫として見られるので、怖がれる事はない
だらうからとこつ理由である。

「//ー」

「こわなり何？」

すると出てくるなりこきなり私の肩へと乗る。

なこ？ そんなにわびしいの。

「ほら、早くい」飯食べて

「//ー」

ハネコは、私の持つている相棒達の中で一番負け盛りでありそし
て一番の甘えん坊。

まあ、私にした良ただウザい駄々っ子みたいなもんなんだけど。

ドカアアアン

「……なにこの音?」

「//ー……」

そもそも卵パンを食べてたら爆発音が後ろから聞こえる。

チラリと後ろを見ると、わざの銀髪君と……後は銀髪君と対立するように立っている三人。

一人は、教室にいた茶髪の背の小さい女子。

名前はわからないな……。

結構周りからモテそうな顔立ちをしている。

次からは、「ちび女」で呼ぶことしよう。

で、もう一人は……ススキ色の髪が逆立つていて、

額からオレンジの炎を出しているのが特徴の熱血な男子。

なんか、パンツ一楮になつてるけど警察に電話した方がいいのか？

それに額から炎出してるし…熱くないの？

まあいいや、命名…「熱血君」にしてこう。

最後は、黄色いおしゃぶりをつけた赤ん坊。

片手には銃を持っている。

命名はそのまま「赤ん坊」でいいや。

銀髪君が火のついた大量のダイナマイトを出し、投げていく。

それを熱血君が素手で消していく。

「わー、スゴ…！」

思わず、目を見開く。

せりて「三倍ボム」と銀髪君が言いダイナマイトを取り出すが、

指が滑りダイナマイトを自分の周りに落としてしまひ。

そのまま爆発 ッと思こせや、

熱血君が一つ残らず消していく。

「全部消した。あ、銀髪君が土下座し始めた」

良く分からぬけど熱血君は、忠誠的なことを誓つてゐる。
ちび女には敵意をむき出しにしてゐるが。

そのあと不良がやつてきて熱血君に手を出しつとめてくると、

銀髪君がキレてダイナマイトを投げていく。

ドカアアン

本日一回田の爆発。

「面白そつな人たちだなー……」

つと、楽しそうに見ていると赤ん坊がこいつを見てこむこと山坂
付いた。

だが私は、気付かなかつたふりをしてそのまま後ろを向く。

さて、次はどうなることや。ひ。

学校（後書き）

主人公が、いつの間にか変な命名をしてます。可笑しい…こんな設定は無かつたはずなのに。ちなみにちび女は清水由香のことです。

自殺志願者

「神崎さん、すいーー！」

「清水さんと対等になつてゐる」

今体育の授業で、バスケをしている。

私はこれでも運動はする方だから結構スタミナがある。

今ちび女がショートの道を阻みなかなか打てない。

仕方ないので、ダンクしながらドリブルですり抜けた。

動きについていけずそのまま立ち上るちび女。

ガコォン

ボールをスローインすると、周りの女子から歓声が上がる。

…もう帰つていいかな？

*

「…何、アイツ」

運動能力がウチよりもあるじゃん。

何気に生意氣…！

「…そういうえば、武が自殺する口ひで明口？」

どうしよ…止めた方がいいかな？

……いや、原作はこのまま変えないで行こう。

それに原作を知らないアイツも

「邪魔はできない筈だしね」

*

次の日

「自殺ねえ……」

私はぽつりと呟く。

先ほど同じクラスメイトの山本武が自殺をするところとでクラスの皆で止めに行っていた。

え？ 行かないのって…行くわけないじゃん。

私はね、めんどくさいの嫌いなんだよ。

それに死ぬのって乐じゃないし……。

自殺を止める権利は無いし、彼にも止められる権利は無い。

まあ、言い方を変えれば

助けない権利もないってことだよね。

止めはしないが助けはする。

…矛盾してるとよつた気があるが気合しない。

「準備は良いね… クレメンス」

「ルー…」

女性のような体つきをして、胸背にはピンク色をした逆三角が生えたポケモン。

種族名はサーナイトで、名前はクレメンスを出します。バイしている。

え？ 今ビームにいるのって？

今、女子トイレに潜んでるんだよね。

で、ここからなら屋上がよく見えるんだ。

今は窓からさわやか君（山本武）とクラスメイトが見える。

後おまけでちび女も熱血君と一緒に止めようとしている。

あ、熱血君とちび女がさわやか君と共に落ちていく。

が、いつぞやのパンツ一楮状態になり、ちび女とさわやか君を助ける。

なぜか頭から、バネのようなものをはやして。

しかし、二人を守っている熱血君だけで着地するのは無理がある。

なので、さりげなく念力を使って着地をせることに。

「クレメンス、念力」

「ルー」

急降下していく三人を念力でゆっくりとおりしていく。

「終わった？ 御苦労さま」

「ルー」

頭をなでるとクレメンスは嬉しそうに頬を赤く染める。

「じゃ、帰らうか」

「ルー」

クレメンスをボールに戻し、家に帰る……あ。

「何か話してるみたいだから、近くに行つて聞いてみよう」

近くに行くとぼれるので校舎の角に身を寄せた。

ちび女が大声で叫んでいるのが聞こえた。

*

「…………死んじやつたら、終わつちやつんだよ？」

何にも出来なくなるし、誰にも会えなくなるんだよ？

それでもいいの！？

死んだら何もかも全部…！ 終わっちゃうんだよっ！！

…………もひ…………もひ「一度と、こんなバカなことしないで…！」

「…人格破綻者があのセリフ聞いたら笑い飛ばすだろうね」

熱血君達には聞こえない小さい声で呟く。

え？ 人格破綻者つて？

人格破綻者、名前は…黒空零クロウラレイ。生前の世界でよく一緒にいた悪友の男子。

性格は、純悪、鬼畜、腹黒で作り笑顔を良くする奴。

ポケモンを使って殺人的なことをする人物だつたりする。

で、手持ちがポケモンはタイプとかが偏っているけど、

技の威力とか素早さでよく相手を打ち負かしている。

「……まあ、もう会えないけど」

今どうしてるかな?

まあ、別にちびしくはないけど…。

それとも行こう。

その後、ちび女はわざわざか君と仲良くなつたとい。

自殺志願者（後書き）

クレメンスはラテン語で「慈悲深い」の意味です。
玖葱はかつこいい外国語や思いつきでニックネームをつける子です。

赤ん坊

いつの間にか夏休みが終わり、私は給水塔の裏でエネコとぼーつとしているとい、

「まだ少し暑いねー！」

「眺めが綺麗なのなー！」

「オレ、屋上来るの初めてだよ」

「十代田にはもっと相応しい場所があると思つんすが……」

…………うるさい人たちが来たな。

帰りたいなー……でも、何か気まずいな。

仕方ない……このまま、熱血君達が去るのを待とう。

寝ながらの体制で熱血部達の話を聞くべしとした。

*

「フマリコーのアシストを作るべし」

別に熱血部の家でいいだら、と思ひ。

息を押し殺し、気配を薄め、身じろぎ一つせず、見つからないようにしてこむ。

「ネ」も私と回りようじつとしてくる。

そのおかげか誰も気づいてはない……はず。

「場所は学校の応接室だ」

「えー？」

赤ん坊の言葉に、ちび女が批判的な声を上げる。

それに、立ち上がりて屋上を出よつとしていた熱血君が振り返る。

「どうかしたの？」由香ちゃん

「知らないの！？」応接室つて言えば

「何でもねーぞ。さつと行きやがれ、ダメツナが」

何かを言いかけたちび女を無視して、赤ん坊は熱血君を蹴り飛ばした。

あれ？ 赤ん坊にあんな力あつたけ？

私の考えをよそに赤ん坊は扉を閉め、屋上には赤ん坊とちび女、

そして隠れている私とエネコの三人と一匹だけになる。

「リボーン君！ 応接室に誰が居るのか分かつてゐるのー？」

「あたりめーだぞ」

「じゃあなんでー！ 恭弥相手じゃツナが……！」

「平和ボケしねーためのトレーニングだ」

激情と共に話すちび女と、淡々と話す赤ん坊の会話を聞く。

なるほど…赤ん坊の名前はリボーンね。

覚えといへ。ちょっと要注意人物として。

「さつあと行かねーヒツナがやられるべ

赤ん坊はちび女を追い立てるよひよひ。

途惑いの表情を見せたちび女だがそれも一瞬のことだ、

すぐに熱血君を追つて屋上を後にした。

「給水塔の影にてひやつ、玉山」

がらりと雰囲気を変えた赤ん坊。

その言葉に軽く息をつくでしまひ。

「の赤ん坊……ただ者じゃない。

給水塔で寝転んでいた体を起して、ハネ口を肩に乗せはじめを使つて下りる。

「聞くつもつはなかつたんだけど……」

本当に……偶然だと思つ。

給水塔の上で毎晩してた……いやしそうとしただけだし。

「オメー 何者んだ」

「…何者って言われても…」

並中生だよ。

あれ？ 他にポケモントレーナーとか破壊魔の肩書もあるけど…
言わない方が身のためか。

「やついたらあの時もいたな」

「あの時つて……銀髪君の時の？」

「やつだぞ」

へー、やっぱ顔覚えられてたのか。

ま、別にいいけど。

「まあ、そんなことはどうでもこーカジな」

「でもこいなら喋るなよ。

「用がないなら私は帰る」

「そうか」

ソリして屋上を去った。

ソの時に赤ん坊が一ビルに笑っていたのは知る由もなかつた。

赤ん坊（後書き）

ヒロイーン（由香）が雲雀さんを名前で呼んでいますね。
ちなみに玖惹は雲雀とはあまり仲良くなりません。
まあ、実力とか見せていませんし‥。

明田も更新予約をさせていただきました。

この話は実は5月11日から構成されていました。
編集をしたりしてちょくちょく出しています。

体育祭

「この学校おかしいんじゃない？」

そう、むさび苦しげに講堂の中で墨苦しげに演説を聴いていて思った。

……………体育祭、明日だよね？

普通、もつと前、それこそ夏休み前から準備しない？

なんで眞自然のように受け入れている？

私がおかしいんですか？ 私の持つ常識は常識ではないと？

体育祭の前日である今日、それぞれの団は団結式を行っていた。

と、そんなもやもやとした感情を吹き飛ばすよつこ、講堂に大きな声が響き渡った。

「オレは大将であるより兵士として戦いたいんだーーーー！」

講堂が静まりかえる。

別にそんな大声で言わなくてもいいんじゃないの？

その後、 笹川了平と銀髪君のかいあつて、 热血君が総大将となつた。

*

「あ、热血君たち…熱心だねー練習」

川沿いの道を歩いていると、 手で棒倒しの練習をしてる热血

君たちの姿が…。

…銀髪君と笹川ア平が喧嘩していく、

熱血君の乗つている棒さわやか少年しか支えていないけど大丈夫なのあれ？

「ツナ！ 頑張つて！」

応援だけですか、ちび女。

あ、熱血君落ちた。

なんかこのまま水に落ちて風邪をひくなんて言つことは、不憫なので助けようか…。

ボールを取り出し投げる。

「…クレメンス、念力」

「ルゥー！」

ピタッと宙に熱血君の体は浮かんでいる。

「え！？ 何これ！？」

「そのまま、土手におひこ」

驚く熱血筋をよそに、ふわふわと浮かびながら土手におひす。

「さて……帰るか」

クレメンスをボールに戻し自宅に帰った。

*

「たけしーっ！……」

「清水さああん！……」

悲鳴のような声援を上げる集団を少し離れた場所で眺める。

「…………はいはい、頑張れー」

黄色い歓声に搔き消されるまでもなく、

まず届かないであろう大きさで、なおかつ面倒くさそうと言つて
みる。

次は、「借り物競走」か。

さつさと終わらせて帰りたいよ。

たしか、1年が私と、ちび女と2年2人で3年2人であつてたつ
け？

あー、めんどくさい。

*

「では、位置につきてー、よーい……」

パン

空砲が鳴り響く。

やる気もないし、だるいけど…ちび女にだけは負けたくないから走ろう。

今、トップで独走中。

カードの内容は…、

『ピンクの猫』

「こんな猫見たことある。

まあか、エネコを出せと……。

「仕方ない」

裏校舎に猛ダッシュ。

「あ、あの神崎ち……」

今呼ばれたような気もするけど、気にしない。

「エネコ」

ボールを投げ、エネコを出す。

「//ー」

「行くよ、時間ないから

エネコを抱き上げそのままホールに走る。

『ゴオオオオオオルツ！！

—— A 神埼玖惹選手！

見事条件の借り物を持ってきました！』

あー、なんて疲れる。

屋上行こう。

*

「ちゃおッス」

出たー！

黄色い赤ん坊。

「…やあ

「お前に用があつてきただ」

…まさか。

「借り物競走の時の裏校舎のあれはいつたい何なんだ？」

「…」

つひ、見られていたか。

油断していた。

「昨日の時も魔獸を出していたしな

昨日の… って見ていたの？

といつかやひば「ポケモン」じゃなくて「魔獸」て呼ぶんだね。

余計な呼び方されるよつはマシだけビ…。

「オメーはいつたい何者だ」

銃を向け問い合わせる赤ん坊。

……別に邪魔する気もないし、あれだよ。

ただ普通に暮らしたいだけなのに。

「昨日の奴も、今さつきの奴は今は言えないけどこれだけは言つと
くよ。

絶対に君たちの邪魔や敵になることだけはしないから。

昨日のボ……魔獣を使って沢田を助けたのは気まぐれや」

……無言。

どうにかしてほしい、この状況。

「……そつか」

そういうて、銃を下す。

話が通じた。

よかつた。

「じゃあ、私はこれで…」「待て」

まだ何か？

歩くのをやめ、後ろを向く。

「神崎玖葱、オメー…ツナのファミリーに入んねえか？」

ファミリーって何？

「…都えとへん」

てか、もう出番ないから家に帰つても大丈夫だよね？

棒倒しが面白いとか、クラスの人たちは言つていたけど私はもう
眠いからね…。

やる気もないから帰らせてもらひよ。

助けてみた（前書き）

今回はオリキキャラが登場いたします。
(後から重要なキャラになります)

玖「読んでくれてありがとうございます。」

お気に入り件数が5件以上超えたから作者はテンションが上がり
まくっています。

…まさかこんな「それ以上言わないでください…」…つち

舌打ちですか！？

玖「では、『助けてみた』のお話をどうぞ！」

助けてみた

「Hネン、おまつせしやがなこで」

「……」

夕飯の買ひ物をしに並盛の商店街へと続く道を歩こう。

買つてもすぐヒタナースとHネンが、よく食べるので冷蔵庫の中がすぐ空になってしまひ。

「まあ… りれじゅあ、咲くもお金が底をつわん」

やばいな… お金が底をついたらどうすればいいのや。

情報屋もみんなに咲くの依頼とかにならぬからあくまし稼げしないし…。

中学生でバイトとかできたりつけ。

とこりかポケモンバトルがあつたらすぐにお金が手に入るの…。

「… うーん、Hネンどうした?」

まだ近くにいるよね。

まつたく、めんどくさいことを。

「エネコー」

ドオオン…

何か爆発するような音が誰も使われていない無人の倉庫から聞こえてきたので、

倉庫の中へと踏み入れる。

まず視界に移ったのはエネコと… 一人の少女が倒れしており、

エネコはそれに寄り添うように一緒にいた。

ただし、黒い服を着た何人かの男たちが現在進行形でエネコと少女を囮んでいた。

何これ？ どういう状況？

「あーめんどくさい…」

まったくめんどくさい事態を作ってくれたものだ。

「行くよー フラメント」

「エル!」

ボールから出てきたのは、男性的なシャープさを彷彿とさせており、

ほぼ人間のような外観を持つている。

また頭部や両肘には鋭利な刃が備わっているのが特徴のポケモンで種族名はエルエイド。

「急いであの二人を助けて」

「エル!」

「な！ 何だてめえらはー！」

「構わねえやつちまえ！」

「うるさい。フランメント、サイコカッター」

「エルー！」

鋭利な刃から放たれるカッターのよつなもので、男たちを一掃していく。

うん、最近戦っていないから思いつきり実力以上の威力を出しているのは氣のせい？

「ヒィー！ ば、化けものだ！」

「ま、魔獣使いだ！？」

「…あ、あ、」

その後も男たち…いや、おひさん共の言葉は続く。

「あんな化け物従えるなんて…恐ろしい女だ」

「なあ…あんな珍しい奴売れば金になるんじゃねえか？」

「違ひねえ、おい先にこの女の化け物を捕まえるぜ」

^{アマ}

「なあ…おっさん共」

「ああ?
なんだ」

「別にや、自分の口の悪口とかいいんだよ。」

言われるの慣れてるし……でもさー人の家族を化けもの扱いして、
拳句の果てにはあ……、

ふざけてんじやねえよ、おっさん共。

そんなにお・仕・置・きが、必要みたいだねええ！－！－！」

絶対にぶちのめす。

さあて…ストレスの発散に使わせてもらいますか？

「行け……タナトス！」

「グオオオオオオアアアアア！――――！」

竜を模したような姿をしており、背中から6枚の翼が生えてい

る。

前足となる部分は、顔になつてゐるポケモン。

種族名は、サザンドリ。

ニックネームは、タナトス。

「全部破壊しろ… 破壊光線！…！」

「グオオオオオオオオアアア…！」

3つの顔から、強大な破壊力を持つた光線がおっさん共に向かって放たれる。

ドゴオオオオオオン…！」

鉄骨や屋根が、まるで紙切れ同然のように簡単に破壊されていく。

うん、いい仕事したねタナトス。

煙がはれると、ぼろぼろになつたおっさん共が倒れていた。

「グルオオ」

「…もういいよ、ボロゾーキンになつたから。

破壊光線をもろくらひてたから、しばらくは動けないね。

フーメントー、生きてるー？」

「エルウ

「…いつの間に？」

エネコと少女を抱えたフーメントが後ろにいた。

テレポートで移動したの？

よく見てみると少女の体は傷だらけで今にも死にそうな状態である。

別に助ける理由とかないからほつといてもいいよね。

「エルル…」

「//ー」

「…[冗談だよ]

まつたく、さすがにそんな外道なことはあるわけないじゃん。

「いや、建物破壊とか自分から進んで外道に近いことはしてたけど。

…しあわせない、自宅に帰らつ。

*

「……」

「やつと田原めたね」

少女が起きたのは、夕方の5時。

かれこれ4時間は寝てたし。

「リリは……どうなんですか？」

「リリ？ めあ、私の家だ」

実際には、廃墟に勝手に住んでいる不法侵入者だが。

「あ、あの」

「何」つと並んでしたところ

ギュウウ～～

盛大におなかの音が鳴る。

おなかの音をならせたのは少女…。

顔を真っ赤にさせ、両手で顔を覆う。

「……なんか食べる？」

「すいません…ありがとうございます」

以外に少女は、礼儀が正しいようだ。

*

「せつねと食べな、冷えたら美味しいなこよ」

ずいつとトレーを田の前に持つてくる。

田の前には私の大好きなドリアが…。

思わずまたお腹がなつてしまつ。

わたしは毛布から出でてきてスプーンをとり恐る恐る一口食べた。

お、おこし…！

味もこくなくて凄く食べやすくて、ちょっと熱かったけどあつといつ間に食べ終えてしまつました。

思つていた以上に私は空腹だったようです。

「…全部食つたよ…すいこな…」

驚きとこつよつは呆れたよつにお姉さんは言つました。

…すいません。

「まあ、別にいいけどね。

で、なんであんなとこ倒れてて黒服のおっさん共に襲われたの?」

黒服のおっさん共?

それはもしかして私を殺しに来た暗殺者たちのことじょうか?

…まさか。

「…まさか暗殺者たちを倒したのですか?」

「…暗殺者だったの、あれ?」

「知らないで倒したのですか!-?」

「一般人なのですか」のお姉さん!

「…まあ、正確には、タナトスがやったんだけ」

何でしょう。小声で言っていたのでなにを言つたのか聞こえませんでした。

「で、やつちの質問の答え聞いてないんだけど」

「…それは順を追つてお話しします。

私の家には代々伝わる秘宝があります。

それに願い事を言いつと、なんでもかなえられるといつものなんです。

そして…どこからか聞きつけたのかそれを狙つているマフィアがいたんです。

ロストファミリーといつ、イタリアで暴動事件などを起こしているマフィアです。

それを手に入れ、自分達の欲望のために願い事をかなえるために奪おうとしたのです。

秘宝を守りうとしたお父さんとお母さんはそこで殺され…私一人になつてしまいました。

秘宝を上げても殺されることとは目に見えていました。

死にたくない一心で秘宝を持ち命からがらここに並盛に逃げ込んできたのですが…。

暗殺者を送り込まれ、あの無人倉庫で殺されそうになつてしまいそうになつたのですが…」

「偶然通りがかつた私に助けられたと…」

「はい…。本題はいじからなんで「却下」え…？」

でも、本題はいじからなんで「却下」え…？」

「どうせ秘宝を守ってくだれことかやつにいとまつんでしょ。

嫌だね、私に対してもリットがない」

やはり…当然の答えですよね。

「そ、そりですか…すみません「ああ、でも」…え？」

「私の家族に化けものや売ろうとか言つた奴らなんだから…責任は取つてもらわないとね」

家族…？

それはこいつたこじの方のことなのでしょう。

「あ、あのそれはいったい」

「ああ、実はおつれん共をやつたのは

やつこいつとお姉さんは腰につけてあつたボールを投げると、

ボールの口が開き竜のようなものが出てきました。

「グゴガアア…！」

「こいつなんだよね」

魔獸…でしょうか？

すゞくいかついです。

「大きいです…！」

「…いつとくけど、化け物とか言つたら容赦なく叩き潰すから」

「は、はい…」

「嗚呼…あとなんかお金とかある？」

お金ですか。

「はい…一応」

「とりあえず人に物を頼む時はそれなりの代価を払わないと私動かないから。

一応ひこことはあるんだね。後で払ってくれればそれでいいよ。

といひで以前はなんていつの?」

「ひこまきがんな
格華美です」

「私は、神崎玖蕙。呼び方は何でも良いよ。

じゃあ……案内してよ。ロストファニアについて肩マフィアの本
拠へぞ」

「」の時の姉さんの表情は……なぜかとてもすいへ黒い笑顔になつ
ていました。

助けてみた（後書き）

フランクは誓いという意味です。

主人公のキャラは、キレると口調がやや変わります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8119x/>

魔獣使いは我が道を行く

2011年12月1日15時52分発行